

アーツサポート関西 (ASK) の最新ニュースをお届けします

寄付を集めて関西の芸術・文化を支援する100%民間の取り組み、アーツサポート関西 (ASK)。関西・大阪21世紀協会に事務局を置き、いわゆる民間版アーツカウンシルとして、寄付者の意向によるファン・ド型支援やアーティストに寄り添った伴走型支援を行っています。

インターグループ上町台地現代アート寄金 ▶ 現代演劇

「上町台地にある旧真田山陸軍墓地と積み重なったまちの記憶をツバメと旅する春」の実施

上町台地の真田丸跡地の東側に広がる日本で最も歴史が古く、また最大規模の軍の埋葬地「旧真田山陸軍墓地」。2021年より演劇関係者や歴史研究者、地域住民らが中心となり、この場所が持つ意味を共有し、議論や対話へとつなげることを目的とした芸術活動が続けられています。2025年3月20日、その一環として墓地周辺をめぐる「まちあるきツアー」とパフォーマンスを組み合わせた公演が行われました。春の訪れを告げるツバメに扮した2名の俳優の先導で、墓碑列の間や墓地周辺を歩き「場所」を体験。続いて行われた室内のパフォーマンスでは、墓碑に名が刻まれた人々のうち、資料が残る数名について、資料から辿ったその人物像がいきいきと描かれました。まさに記録と記憶が交錯する場となりました。



旧真田山陸軍墓地での実施風景。石原菜々子(左)、高安美帆(右) 写真：石井靖彦

トヨタモビリティ新大阪ASK支援寄金助成 ▶ クラシック音楽

COLORFUL QUARTET 島之内教会でフルート四重奏の演奏会を開催

関西を拠点に活動する4人の若手フルート奏者たちにより2018年に結成されたフルート四重奏団、COLORFUL QUARTET。4名とも違う大学出身というカラフルな個性を生かし、自主企画のリサイタルを通してフルートの詩情豊かな響きを人々に届けています。特に力を入れているのが、フルートのために書かれたあまり知られていない楽曲の紹介。演奏会ではそうした曲を含め、フルートの魅力を存分に引き出します。2025年4月26日に大阪・心斎橋近くの島之内教会で開催されたコンサートでは、ヴィヴァルディやドビュッシーなどの知られた曲をフルート四重奏で演奏したほか、下田和輝、渡部哲哉、三浦真理ら日本の現代作曲家によって書かれたフルート用の室内楽曲を披露。教会の凛とした空間に美しいフルートの音色を響かせ、会場の人々を魅了しました。



左から、北川聖香、朴優栄、森田侑里奈、葛城郁也(会場：島之内教会／大阪)

一般助成 ▶ 音楽

immeasurable「聴くことのアレゴリー 02」の開催

商業ベースにのりにくい実験的な音楽を世に送り出す音楽レーベルimmeasurable（イメジャラブル）。Immeasurableとは「計り知れない」といった意味をもち、知覚される音楽と物理的に存在する音との関係を、メディアを介して探求する試みを行っています。2023年に続き、人々が集まり、その場に生じる音を知覚的・経験的に共有するイベント「聴くことのアレゴリー02」を、5月24日に神戸のspace eauuuで開催。fendoap、岡千穂、peeqの3名の若手注目音楽家を招き、デジタルで生成される「音楽」をテーマに3部構成で行われました。第1部では紙コップをスピーカーに3名それぞれがデジタルで作られた音楽を演奏。第2部では「音楽」の魅力を語り合い、第3部では3名が即興を交えた合奏を披露し会場を沸かせました。デジタル／アナログ、音／音楽の境界を考察する公演となりました。



「聴くことのアレゴリー 02」演奏風景
左からfendoap、岡千穂、peeq(会場：space eauuu)

一般助成 ▶ 舞台芸術

劇団三毛猫座 展覧会と演劇が融合した公演「優美な死骸の採集」の開催

劇団三毛猫座は、2015年に京都市立芸術大学で美術を学ぶ学生らが旗揚げし、今年で10周年を迎えます。現在のメンバーは全員女性。抽象的・装飾的な舞台美術に多量の言葉を持ち込む「聞く舞台」を創出し、視覚と言語の融合の可能性を探ります。今回の公演もそんな演劇の可能性を拡大する試みとなりました。会場となったTHEATRE E9 KYOTOの空間に詩やドローイングを展示する「展覧会」を開催(5/29～6/1)。かつてシュルレアリストが行った詩作技法「優美な死骸」に依拠し、長年劇団が取り組んできた膨大な数にのぼる詩とドローイングで空間を埋め尽くしました。その空間で、会期中数回にわたり、女性たちが暗がりに向けて言葉を解き放つモノローグ的なパフォーマンスを演じました。演劇に備わる言葉と視覚を媒介する役目を感じさせる公演となりました。



劇団三毛猫座「優美な死骸の採集」会場風景(会場：THEATRE E9 KYOTO)
写真：駒和樹

一般助成 ▶ 音楽

日野浩志郎 打楽器のみによるミニマリスティックな音楽の公演「Chronograffiti」

日野浩志郎さんは、大阪を拠点に自身のバンドの活動や、太鼓芸能集団「鼓童」とのコラボレーションなどで音楽の規範に挑み続ける世界的に注目される音楽家・作曲家。この公演は、ドイツのMoers Festivalの委嘱で作曲され、6月に世界初演された曲の日本初演となりました(7/25～27、クリエイティブセンター大阪)。タイトル「Chronograffiti」は、時間(Chrono)と視覚(graffiti)を融合させた言葉です。演奏は卓越した技量を持つ3名の打楽器奏者によって行われ、ボンゴなどの最小限の打楽器のみを用い、繰り返されるリズムの陶酔によって聴く者に高揚感をもたらしめます。加えて古館健によるヴィジュアルエフェクトによって演奏者たちの激しい手の動きが空間に優美な残像の軌跡を描き、原初的な音楽ともいえるべき「リズム」が精神の深層に作用することを、音と視覚の両面から実感させる公演でした。



日野浩志郎作曲による公演「Chronograffiti」の演奏風景。
左から、谷口かな、安藤巴、前田剛史
(会場：Black Chamber／クリエイティブセンター大阪) 写真：井上嘉和

(敬称略)